

## 困窮の是認と同等化の行方

### －存在の歴史における根本気分についての一考察－

陶久明日香（学習院大学）

本発表では、ハイデッガーが 1930 年代以降展開する存在の歴史的思索において重要視される諸々の気分、特にその移行的思索を支える「別の始元の根本気分」とされる「驚怖 (Erschrecken)」、  
「物怖じ (Scheu)」、「控えめ (Verhaltenheit)」ならびに、「我々の今日の現存在の根本気分」と称される「退屈 (Langeweile)」に焦点を当て、存在の歴史においてこれらの気分が担う事象的意義について検討する。

ハイデッガーの存在の歴史的思索において気分は、存在が人間に関わる仕方とされ、しかも西洋という領域を共有する複数の人間に関わり、またそれ自身歴史的な性格をもつ現象とみなされている。この歴史の「第一の始元」である古代ギリシアにおける始元を規定しているのが「驚愕 (Erstaunen)」という根本気分であり、それは後続の歴史をずっと支配し続けるものとされる。「驚愕」は、尋常ならざるものとしての存在、換言すれば現れと隠れとが一体となったアレーテアとしての、ピュシスとしての存在に面してギリシア人が襲われた気分であり、尋常ならざるものに魅了されて打ちのめされ縛られつつも、尊敬の念からそこから距離をとってそれに対するいかなる態度も差し控え、己をその下位に置くという契機を有する。こうした契機から、ピュシスを「何が存在するのかを決定する尺度」と見なし、己をこの尺度の下位に置くという「純粋な是認」という人間の態度が生成した。

しかし尋常ならざるものに対するあらゆる態度を差し控えるというこの驚愕から生成した「純粋な是認」のために、アレーテアは不問にふされ、殊更に堅持されず、すでにプラトンにおいてアイデアが尺度の座を占めるに到る。この際、ギリシア人たちがピュシスに対して抱いた打ちのめされの感覚は消え、己を尺度と同じ位置に置き、自身を尺度へと向ける (sich richten) という意味での「同等化 (Angleichung)」という態度が生成する。ハイデッガーによればこの「同等化」という出来事こそ、アレーテアとしての真理をホモイオーシスとしての「正しさ (Richtigkeit)」へと変転させ、デカルト以降、人間が「何が存在するのかを決定する尺度」を様々な「客体」に対して設定する「主体」という立場になることを可能にした当のものである。そこでは本来は尺度として生成したピュシスはテクネーのほうから測られ、単なる自然と化す。さらに現代においては「言語の情報化」という要素も加わることにより人間と物との同等化までも生じ、情報としての操作可能性という尺度を人間は客体としての諸事物のみならず、おのれ自身にも適用することになる。このことが導くのは、ハイデッガーがその技術論において警鐘をならす人間存在の破壊、そしてあらゆるものが画一的になり、差異が消滅するという事態である。またこのことと切り離せないのが、驚愕という気分においてギリシア人を襲った存在が、すでに存在者を見捨ててしまっているという意味での「存在棄却」という現象である。

こうした驚愕という気分が存在の歴史において担う事象的意義を背景としつつ、本発表では、別の始元の根本気分ならびに現在の根本気分と称される上述の諸気分が担う事象的意義を検討することになる。論述の中心となるのは、第一の始元と別の始元との関係、「同等化」という出来事が超克される可能性は上記の諸気分の契機の内に見出され得るのか、また先の「純粋な是

認」を別様な仕方で展開する別の始元での「困窮の是認」という人間の態度の内実は具体的にはいかなるものとして捉えられるか、また気分はこの態度の形成にどのように関わり得るのかということである。この際特に注目したいのは「同等化 (Angleichung)」の超克を可能にするものと考えられる「調停 (Ausgleichung, Austrag)」、尺度の受取、有限性の自覚、言語の脱情報化、そして存在の歴史を規定している根本気分に対する現存在の「勇気 (Mut)」としての「心情 (Gemüt)」といった事象である。

「別の始元の根本気分」に関しては、『哲学への寄与』(1936-38年)の論述が差し当たり手引きとなるが、「驚怖」、「物怖じ」、「控えめ」の気分を扱うハイデッガーのヘルダーリンについての諸講義も考慮に入れつつ、驚愕との対応関係ならびに上記の問題との連関を検討する。また現在の根本気分と称される「退屈」に関しては『形而上学の根本諸概念』(1929/30年冬学期講義)の詳細な分析をベースとしつつも、『哲学への寄与』ならびに講演「故郷の夕べへの式辞」(1961年)など、技術の問題と関係する論述も考慮に入れつつ「別の始元の根本気分」との関係を明らかにすることを通じて、存在の歴史においてこの気分が担う事象的意義を示すこととなる。